

昔むかし、ラ・レアールに、ひとりの修道院長がいました。のんびりした人で、おそろしいほど太っていました。そして、日に日に太っていききました。

ある日のこと、修道院の前の道を、王さまが通りかかりました。王さまはやせていて、さとうきびよりもほっそりしていました。王さまは、修道院長を見て、声をかけました。

「修道院長よ。いったいどうして、あなたがそんなに太っていて、わしがこんなにやせているんだらうね」

修道院長は答えました。

「王さま、それは、あなたがいつも頭痛に苦しめられているからです。だからそんなにやせているんです。わたしなら、頭痛なんて、かんたんにふつとばしますよ」

王さまは、頭痛に苦しんでいたので、頭痛がどんなにいやなものか、こののんきな修道院長に思い知らせてやりたいと思いました。そこで、しばらくおしゃべりをしてから、別れぎわにこういいました。

「修道院長よ。あなたに問題を三つ出すから、三日のうちに答えを持って城にくるよう。第一問。わしのいちばん上等の服を着れば、わしはどれほどの値打ちがあるか。第二問。馬が世界をぐるりと一周するのに、どれくらいの時間が必要か。第三問。わしが何を考えているか。これらの問題に答えることができたなら、あなたの体重と同じ重さの金貨をあたえよう。もしも答えることができなかつたら、あなたが愚か者であると、世間に触れてまわるぞ」

そういうと、王さまは立ち去りました。

修道院長は、口もきけないほど困り果てました。考えに考え、しまいに頭痛におそわれ、頭ががんがん痛みだしました。ねむることさえできません。修道士たちは心配して、「いったい何が起こったのですか」とききました。修道士は、

「たのむ。静かにしてくれ」というばかりです。

二日目、とうとう、修道院長は、修道士たちにいいました。

「王さまが、わしに三つの問題を出したのだ。それを三日のうちに答えなければ、わたしは世間の笑いものになるのだ」

そして、王さまの値打ちがどれほどか、馬が世界を一周するのにどれくらいの時間が必要か、王さまが何を考えているか、という三つの問題を話しました。それを聞くと、修道士たちは、とほうに暮れてしまいました。修道士たちはいいいました。

「修道院じゅうの人を集めてきてみましょう。ひとりぐらい、この迷路から抜け出す方法を知っているかもしれませぬ」

三日目、修道院長は、修道院じゅうの人々を集めて、王さまから与えられた三つの問題のことを話しました。

「あしたの朝までに、答えを出さなければ、王さまは、わたしが愚か者だと世間に触れてまわるとおっしゃるのだ」

けれども、だれひとり口をきくことすらできませんでした。すると、若い料理人が立ちあがっていました。

「ちよつとお話してもいいですか」

「役に立つことなら、なんでもいつてくれ」と、修道院長はいいました。

「では、申します。わたしはこの三つの問題に答えられると思います。ただし、条件があります。院長さまの服をわたしに着せてくださること、わたしが自分で王さまにお答えすることです」

朝になると、料理人は、修道院長の服を着て、王さまのお城に向かいました。料理人は骨と皮ばかりにやせていたので、服はだぶだぶで、後ろに引きずって歩いて行きました。服の中に、料理人があと三人、入れそうなほどでした。これを見た人たちは大笑いしました。

お城に着くと、料理人は、門番に、

「ラ・レアルの修道院の者です」といいました。

王さまは、それを聞くと、

「そいつは、修道院長にちがいない。ここへ連れてまいれ」といって、いちばん上等の服を着て、王のいすにすわりました。

料理人が入ってくると、家来たちは、口々に、

「あの院長は、自分の体よりはるかに大きい服を着ているぞ」といいました。王さまは、にんまり笑って、

「だまれ。わしが問題を出してから三日がたったのだ。あのときは、みごとに太っておつたが、答えを考えているあいだにこんなにかからびたのだ」といいました。そして、心の中で、

（頭痛がどんなにいやなものか、思い知つただろう。いい薬だ）と思いました。

王さまは、修道院長に化けた料理人にいいました。

「さて、第一問の答えは何だ。この服も含めて、わしはいつたい、どれくらいの値打ちがあるかね」

「銀貨二九枚です」

王さまも家来たちも、びつくりして飛びあがりました。

「なんだと、たった銀貨二九枚の値打ちしかないというのか」

「はい、その通りです。銀貨二九枚であつて、それ以上ではありません。なぜなら、ユダは銀貨三〇枚でイエス・キリストを売りました。イエスさまより以上の値打ちが、王さまにあるはずがありません」

王さまと家来たちは、口をぱたんと閉じて、何もいえず、首をぐるぐる回しました。

「では、第二問だ。馬が世界を一周するのにどれくらいの時間が必要かね」

「馬が太陽と同じ道を進めば、ちよつど二十四時間で世界を一周できるに決まっていますではありませんか」

王さまと家来たちは、また何もいえず、立ちすくんでしまいました。

けれども王さまは、第三問には勝つ自信がありました。他人の考えていることを見すかすなんて、だれにできようかと、王さまは思いました。

「では、第三問。さあ、この瞬間に、わしは何を考えているかね」

「王さまが、何を考えていらっしやるかですって。もちろん、王さまは、わたしがラ・レアールの修道院長であると、考えておられます」

「当たり前だ。おまえが、ラ・レアールの修道院長以外のだれかだなんて、考えられないじゃないか。そんなことは答えにはならん」と、王さまはどなりました。

「では、申し上げましょう。わたしは、修道院の料理人でございます」

料理人はそういって、修道院長の服をするりとぬぎました。みんなはあっけにとられました。どこから見ても、それは料理人でした。家来たちはいいました。

「王さま、わたしたちはみんな、この男が修道院長だと考えておりました。王さまの負けでございます」

王さまは、笑っていいました。

「この男はみごとに答えよった。だが、幸いなことに、この男は体重が軽いから、金貨もそんなに多くはいらない。もしほんとうの修道院長だったら、金庫がからっぽになるところだった」

みんなはすぐに金庫に行き、料理人と同じ重さの金貨を計りました。そして、それを大きなかごに入れて、修道院まで運びました。料理人は、復活祭の朝のように晴れやかな顔で、いっしょに帰って行きました。もし死んでいなければ、今もやっぱり生きています。

そののち、王さまは、修道院のだれにも、難題を出す気にはなりませんでしたとき。

さあ、さあ。求める者は、見出すよ。